藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

客船の中の礼拝堂
～上海・済州島クルーズ③～

豪華客船タイタニック号が氷山にぶつかり、沈没して今年はちょうど百年目にあたる。当時の最新鋭の船が処女航海で沈没したのだから世界中で話題になった。何回も映画化され、私もディカプリオ主演の映画を見てタイタニック号をしのんだ。

欧米の貴族文化として発展したクルーズ。欧米の文化はキリスト教抜きでは考えられず、客船の中に礼拝堂があるのは当然なのかもしれない。映画でも礼拝のシーンがあった。しかし、非キリスト教国の日本に生活する者にとって、大型客船とはいえ、限られた空間の中に礼拝堂があることに最初は驚いた。

今までのクルーズの礼拝堂は小さな結婚式場のようなものや、物置だったりして礼拝に使われているという感じはなかった。

ところが今回のコスタ・ヴィクトリア号は前回のアラスカクルーズの客船、サファイア・プリンセス号（十一万六千トン）より四万トンも小さいのに、礼拝堂は大きく、写真のようにカトリックの祭壇もきちんとしている。

さらに驚いたのは、船内新聞に毎日、礼拝の時間が明記されていたことだ。ただ、礼拝が午後十一時と余りに遅い。おそらく乗客のためのものではなく、乗組員のためのものなのだろう。

コスタ・ヴィクトリア号はイタリア船籍の客船で、船長はじめ、上層部はほとんどがイタリア人、ウエイターやルームサービスの担当者はフィリピンやインドネシアなどアジアの人たちが多い。とにかくイタリアといえばカトリックの総本山・ヴァチカンのあるところで、国民の多くがカトリック教徒である。信徒である乗組員のために、乗客は寝て乗組員としての仕事が終わったあとの夜十一時からの礼拝があったので参加した。礼拝堂で待っていると、乗組員の制服を着た中年の男性が香部屋に入り、祭服に着替えてミサが始まる。

戦争映画で時々、チャプレン（従軍司祭）を見たことがあるが、多分、乗組員として仕事をしながら船付き司祭としてミサをたてたり、告解を聴いたりしてるのだろう。語学力があれば司祭にいろいろ聞いてみたいのだが、日本語しか話せない私には一緒に記念撮影が精いっぱいだった。

船内にあったカトリックの礼拝堂

船付き司祭（インド人）と記念撮影

貴重品を入れたカバンの紛失事件のお陰で親しくなった船の日本人コーディネーターの話によると、乗組員の多くは一度乗船すると平均して一カ月ぐらいは休みなし。ホスピタリティ精神で誰もがニコニコと乗客と応対しているが、家庭を離れ、船という限られた空間で休みなしに働くというのは精神的にも簡単ではないという。

そんな人たちのためにも聴罪司祭（告白を聴く神父）は大きな役目があるのかもしれない。とにかく、祈りの空間がきちんとあることに好感がもてた。

船に乗る東南アジアの人たちにとっては、休みなしで働いて自分の国で働くよりはるかに賃金が高い。いわば出稼ぎ労働者。ルームサービスの女性が最後に書くアンケートに「応対が良かったと書いて下さいね」と言ったのが印象に残った。